

「人生最期の瞬間」考える一冊

四日市で在宅医療 医師・石賀さん出版

『最期まで、命かがやいて』を出版
した石賀丈士さん 四日市市山城町



四日市市で在宅医療の医院を開く医師の石賀丈士さん(39)が、『最期まで、命かがやいて』(幻冬舎)を出版した。これまでに千人以上の患者をみとった経験を通して、「人生最期の瞬間をどう迎えるか」を考える内容にしたという。

石賀さんは、末期がんや難病の患者などを在宅で緩和ケアする「いしが在宅ケアクリニック」を2009年に開設。現在は、7人の医師が約320人の患者に在宅医療を提供している。患者の6割以上が余命数カ月を宣告された末期がん患

者だ。

本では、これまでにみとった8人の患者を紹介した。

末期がんで寝たきり状態だった77歳の男性は、自分で歩けるほど元氣を取り戻し、趣味のカラオケをしたり絵を描いたりして、充実した生活を送った。悪性黒色腫に侵された43歳の女性は、宣告された余命を超えて、野球をする高校生の息子のために毎日お弁当を作り、娘の成人式を見守った。病氣になっても、最期の瞬間まで幸せに生き抜く患者の姿が描かれている。また、病状の見分け方や対処法、保険制度や薬の説

明など、患者を支える家族に向けた情報も充実させたという。「病氣になったら『絶対、病院に入院』ではなく、選択肢の一つとして在宅ケアを広めたい」と石賀さんは話す。

20年前の祖母の死が、石賀さんが在宅ケアの道を選んだ原点だ。死の前日まで会話や食事をしていたという祖母は、家族に囲まれて85歳の時に自宅で亡くなった。おだやかに死を迎えた祖母のように、「やりたいことをやって残りの人生を楽しんでほしい」と願う。

221ページで1300円(税別)。全国の書店などで買える。問い合わせはいしが在宅ケアクリニック(059・336・2404)へ。(井上昇)